ISSN 1346-7220

鹿児島大学総合研究博物館

THE KAGOSHIMA UNIVERSITY MUSEUM

Newsletter

NO.27 NOVEMBER 2010

喜平ユカリ　レース展　永遠のきらめき

鹿児島大学総合研究博物館では放送大学鹿児島学習センターと鹿児島大学附属図書館との共催でレース展「永遠のきらめき」を開催いたします。喜平ユカリさんは放送大学の学生として学びながら、レースを教え、また作品を作ってこられました。喜平さんの作品をつうじてレースの歴史と文化、ヨーロッパと日本の交流の一端を知っていただければと思います。（大木公彦）

英国のホニトン・レース　作品：日傘の少女

ホニトン・レースとは、ボビン・レースの産地として有名な英国の地方都市ホニトン産レースの総称です。1560年以降、20世紀初期にかけて発展しました。

英国では「ヴィクトリア・パラソル」と呼ばれる顔だけがかくれる小さな日傘が1840年頃から流行します。思わず横顔が気になります。また、1850年から1860年代のファッションではクリノリンスタイルのドレスが流行しました。上の写真は喜平がレースで当時のファッションを表現した作品です。（喜平ユカリ）

永遠のきらめき　レース
～ヨーロッパレース芸術の光彩～

喜平ユカリ（ボビン・レース作家）

1．はじめに　－レースとの出会い－

フェルメール『レースを編む女』
田中京子　鹿児島大学名誉教授撮影

私とレースの出会いは、パリ、ルーブル美術館のフランドル・オランダ絵画室にあるフェルメールの「レースを編む女」でした。それは、とても小さな絵でした。描かれた女性の伏せた目は指先に注がれ、全神経がレースに集中しています。静寂のなかピーンと張り詰めた緊張感と温かみのある絵という印象を持ちました。当時の私は「レース」そのものがよくわからないまま、題名を黙読し、鑑賞しただけでした。オランダ美術は目立たない地味な分野という印象で、フェルメールの絵も慎ましすぎるくらいひそやかでした。

それは私にとって初めての海外旅行1989年春の出会いでした。その後も何度か海外に出かけましたが、あの時ほど心の動揺の抑制、期待や不安の制御とともに決意も必要だと思ったことはありません。東京に本社がある着物会社の主催旅行で、イギリスとフランスでの着物の視察が目的でした。

鹿児島で着付けを学び、旅行準備をしていた出発８日前のことでした。最初に訪ねるイギリスのヒースロー空港で、テロリストによる爆破事件が起こったのです。旅の喜びと期待が消え、不安を抱きながら変更スケジュールの通知を待ちました。結局、最初にフランスを訪問することになり、自由時間には一人でルーブル美術館を訪ねフェルメールの絵に出会ったのです。

その後、私たち一行はイギリスに渡り、自由時間に50代半ばの着付けの先生と二人でビクトリア＆アルバート・ミュージアムを訪ねました。創立は1852年で、イギリスを中心とした世界の工芸品や彫刻、絵画など様々なものが展示されています。先生は仕事柄ぜひ見学したいとのことで服飾の展示された部屋へ向かいました。その中で今度は「レース」に、実際に出会い、鑑賞することができたのです。

そこには、大作のレースが展示され、製作者たちの情熱が迫力となって迫り、感動の連続でした。ルーブルで見た「レースを編む女」の「レース」は「これだったのね」と胸の中で想い、その後、美術館で絵を見るときは服飾を意識しながら鑑賞を楽しむようになりました。

突然の旅行スケジュールの変更でしたが、これは、まず初めに私をレースの絵と出会わせ、そしてレースの実物へと惹きこんでゆくという出会いのためだったのではないかと思えてなりません。一日では、とても全部見ることができないほど、膨大な数の展示物の中で、私は偶然にも素晴らしい出会いに恵まれ、幸運であったとあらためて思います。これが「レース」と私との出会いでした。

2．What is Lace?

レースとはいったい何なのでしょう。それは、１本の糸、または何本かの糸を撚り合わせたり、透かし模様にしたものの総称です。以下のような手製と機械製のものがあります。

・鉤（かぎ）針で編むクロッシェ・レース　　・ねじってからませて織るボビン・レース

・針でかがるニードルポイント・レース　・布地を化学消去してつくるケミカル・レース

手工レースは機械や化学薬品を使った製法を用いずに手あるいは単純な用具を使って作るレースです。18世紀の産業革命以前の手製レースをさします。英語ではハンドメード･レース（hand･made lace）でマシーンメード・レース（machinemade lace= 機械レース）の対語です。また、広義にはカットワーク、オープンワーク、ドロンワークを布全体に施して透かし模様にしたものやネットやチュールなどの網状の布に刺繍をして透かし模様に作られたものも含まれます。

レースの語源はラテン語の古語ラシ（lassis あるいはlacis）が変化した俗語ラキウム（lacium= 結んでできた輪）から発生したものです。以下もレースの同意語として用いられます。

・フランス語のポワン（point）、ダンテル（dentelle）
・ドイツ語のカンテ（kante）
・イタリア語のプント（punto）
・針目の意である英語のポイント（point）

ボビン・レース専用の麻糸と英国・ベルギーボビン

ボビン・レースとは

ボビンとは小さな糸巻きという意味です。４本の糸を単位としてレース用のクッションあるいは枕台であるピローに図案をのせ、ピンを打ちながら、ボビンに巻いた糸を〈ねじる〉〈わたす〉の二つの操作の組み合わせの繰返しによって織り上げる、〈織る〉、レースです。ホールステッチ（whole stitch）、ハーフステッチ（half stitch）の組み方などがあります。別名、ピロー・レース、また骨製のボビンを使ったことからボーン・レースともいいます。モチーフとグラウンドを同じ糸で同時に作製する連続糸技法です。

レース制作のプロセス

16世紀中期にはイタリアで専用のパターンブックが刊行されていますが、当初のデザインはニードルポイント・レースを模倣したものが多く、技術も比較的単純で細幅のものに限られていました。しかし17世紀後期にはフランドル地方やイタリアのミラノやジェノバを中心に発達し独自のスタイルを生み出しました。ロイヤルファミリーは、美しいレースを身に着けて楽しんだのです。宮廷中心に流行・変化していったレース文化、まさに17～18世紀はレース全盛の時代でした。なかでも、男性の服に取り入れられたクラヴァットというレースのネクタイは身分の高い紳士にとって欠かせないステータスシンボルだったのです。彼らは無理をしてでも求めました。上等な品は、今日価格で一枚200万円以上にもなるといわれ、地方領主は葡萄畑を手放してまで手に入れたという逸話があります。また、ベルギーのボビン・レースはフランスが真似のできないほど極細の糸を素材にしていました。1cm幅に222本のレース糸を並べることができ、しかもしなやかで耐久性もあり、洗えば洗うほどつやがでるという素晴らしい性質を持っていたのです。フランダース地方ではボビン・レース産業がさらに繁栄し、18世紀に全盛を迎えたのです。しかし英国の産業革命以降、安価にできる機械レースに取って代わられ、衰退の道を辿りました。

メッヘレン・レース　19世紀　ブローチ
ベルギー

また、ボビン・レースの中で、とりわけ有名なのはブリュッセル・レースです。

3．手工レースの歴史

バンシュ・レース　18世紀　ベルギー

ボビン・レースとニードル・レースの混合　19世紀
ドイリー　英国

レースには､｢手工レース｣と｢機械レース｣があります。ヴェネツィア、ジェノヴァ、ブリュッセルなど、これらは古くからの手工レースの産地です。各地とも繊細で表現豊かな個性あふれるレースがつくられました。カットワーク、フィレレースから始まったレースはやがてニードルポイント・レース、ボビン・レースへと移り、16世紀から華麗な発展をみせました。

現在のようなレースに発達したのは13世紀頃、教会の修道女の手仕事として行われたナンズ・ワーク（nun's work= 修道女の手芸）が基になっています。14世紀には、フランドル地方（現在のオランダの一部、ベルギー西部、フランス北部の地域）で白亜麻糸をボビンに巻いてブレードを編む技術が考えられ、14世紀から15世紀頃にはイタリアを中心にボビン・レースをつくる時の台となる枕（pillow）が考案され、初期のボビン・レースが誕生しました。これが16世紀中頃にはヨーロッパ各国に伝わり発展したのです。この時期、イタリアのヴェネツィアとフランドル地方では、縫い針と糸を用いてニードルポイント・レースの初期のプント・イン・アリアが考案され、レースの代表的なボビン・レースとニードルポイント・レースの基盤が築かれました。16世紀中頃から17世紀初めには、大きな衿のラフ（ruff= ひだ衿、フランス語でフレーズ fraise）や前飾り、裾飾りにこれらのレースが多く用いられ、ヨーロッパ中に普及していきました。フランスではイタリアのレースより優れたニードルポイント・レースを作るために、1665年、ルイ14世の宰相コルベールがセダンに王立製造所を創設、フランスレースを確立しました。その後、クイーン・レースとして有名なアラソン・レースもつくられるようになりました。

一方、ボビン・レースはベルギーで精巧なブリュッセル・レースがつくられ18世紀にかけてヨーロッパ中を風靡しました。しかし、英国の産業革命やフランス革命などの影響により手工レースは激減し、代わって機械レースの出現により複雑な模様のレースが大量で安価に生産されるようになりました。日本では1920年代にレース機械が輸入され、国内各地で大量に生産されるようになりました。

ボビン・レースの源流は400年前のヴェネツィア（イタリア）に溯りますが、その起点は古代エジプト、ルクソール周辺のコプトスという都市です。そこは農耕地帯で｢豊穣の神ミンを崇拝｣する都市でした。コプトスの遺跡からボビンと共に作品が発掘され、３世紀から４世紀頃つくられたものと言われています。

作品に駆使されている技法には編む・組む・刺すといった本来人間の手にそなわった手芸の基本要素が取り入れられていたことでしょう。また、古代ギリシャ、ローマ時代には、衣服の破損した部分をつくろうために糸をかけ補強したり、装飾を施すためのメッシュ・ワークがほどこされていました。

ポワン・ド・フランス（point de furance 仏）

フランスでつくられたレースの総称です。1665年から1675年にかけてコルベールの重商主義政策によるレース産業の創設振興を機に生まれた名称でもあります。

オーリャック、セダン、ルーダン、アラソン、アルジャンタン、アラスなどに王立レース製作所を設け、イタリアやフランドルからニードルポイント・レースやボビン・レースの技術者を招き、国内のレース産業の育成に努めました。六角形のブリッドによるメッシュ地に王朝模様、王冠太陽、花唐草などの優美な大柄模様のニードルポイント・レースが特徴です。やがて1670年代後半になると、各地で独特の様式が確立し、各地の名称がつけられるようになります。

4．レースの用途と想い

レースの技術はニードルポイント・レース、ボビン・レースが中心です。ブリュッセル・レースのように両方の技法の混成のものもあります。礼拝用品、衣装、婚礼用のヴェール、帽子、垂れ飾り、飾り襟、飾り袖口、ストッキング、ハンカチーフ、日傘、扇子など、ドレスや装飾品に多様で精緻な形で施されています。レースを身に着けた装いが同時代の肖像画などの絵画に見ることができます。

16世紀から17世紀のレースの中心は、ヴェネツィア、フランス、ベルギー、イギリスであり、さらにその他の欧州各国の王侯貴族に熱狂的に愛好され広まっていきました。襟や袖口を飾り、宝石とともに貴族たちの礼装に欠かせない装飾品となりました。王侯貴族のレースは見る者にそれ自体の美的価値だけでなく、所持者の社会的地位も表わしました。レースの価値が社会的に評価されていたからこそ、それを身につける人々の身分や階級表現の有力な手段となったのでしょう。

飾り襟　著者制作　ボビン・レース

レースの価値、それは装飾性にあります。極めて凝縮されたデザインで、より細やかで精緻なレースが求められていきました。レースが自然から与えられた材料は麻糸だけで、道具は単純であり、その価値は人間の織りなす技術だけが付加価値となります。レースの技法は見た目の美感を越えて、より高度に、より複雑で困難な時間のかかる方向へと進んでいきました。またレースは、政治、経済、文化、美術工芸、服飾などの変遷に影響されながらそれぞれ各地の特色を出すように変化したのでした。

メッヘレン・レース　19世紀　ブローチ　ベルギー

レースはヨーロッパ各地に生まれましたが、いずれも戦争が繰り返された時代の産物でもあります。人々は驚くべき忍耐力をもって、レースの技術を発展させ、感動的な作品を生み出したのです。それを制作するためには、莫大な時間と根気が必要です。美的に優れたものを制作するために試行錯誤し、あるいは願い事に思いを馳せながら、こつこつと手を進めていったと思われるものもあります。祖母から母へ、母から娘へ代々受け継がれたレースも少なくありません。自らの安穏を祈り、あるいは故人の供養のために愛用されていたのです。

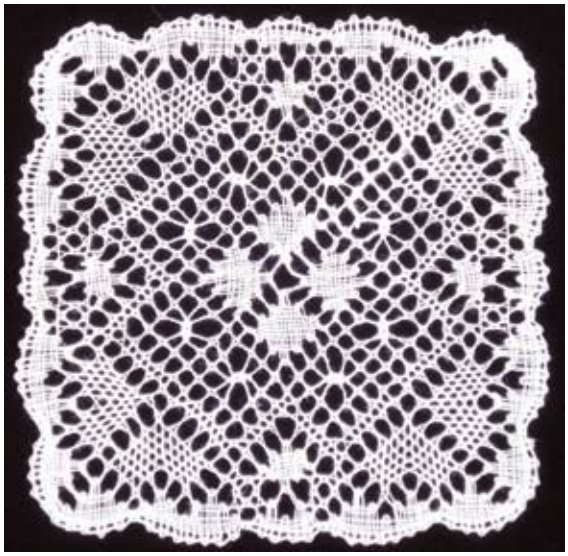
装飾としてのハンカチーフ・レース

ハンカチーフの本来の用途は装飾にあり、非常に手の込んだ高価なものでした。手にさりげなく持つハンカチーフや手袋は、美の構図に欠かすことのできない大切なアクセサリーだったからです。

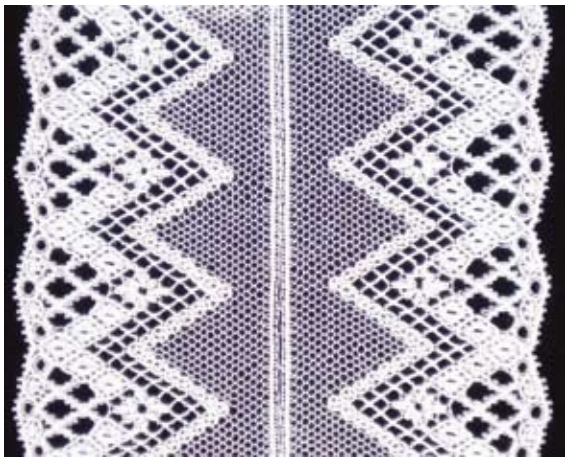
レースがハンカチに応用されたのは16世紀です。イギリスではエリザベスⅠ世の時代です。レースの盛期は18世紀のロココ時代でしたが、さらに19世紀になってレースの需要は復活し、大切なハンカチーフはレースでつくられました。イニシャル文字の組みあわせがあるハンカチーフには深い思いが込められています。

イニシャル入りのハンカチーフ　19世紀

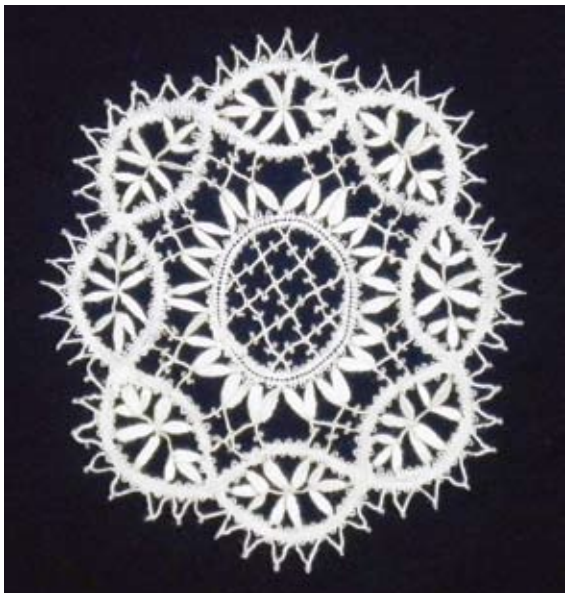
5．英国ボビン・レースを学び、楽しむ



トーション・レース　著者制作



バックスポイント・レース　著者制作
英国ルートン博物館のオールドパターン



ベッドフォーシャー・レース　著者制作

何気なく始め、いつの間にやら虜になっていたボビン・レース。歳月を積み重ね東京で９年間ボビン・レースを学ぶ機会に恵まれました。ふと気がついた時にはとても好きになり、同時に私にとっての大切なものとなっていました。レースに憧れました。そしてレースと話せるようになりたいと希求しました。今ではレースの声が聴こえてくるような気がします。そこで、レースに代わって、英国ボビン・レースの種類の紹介とヴィクトリア朝時代のレースについて綴ってみたいと思います。

1563年以来、英国ではケント州の海岸に移住してきた亡命者たちも各地でレース工業を興しました。その５年後メッヘレン（ベルギーの都市）から亡命してきた人々によって今度はベッドフォード州やバッキンガム州に根をおろしています。

英国のボビン・レースには４種類のレースがあります。トーション･レース､バックスポイント･レース､ベッドフォードシャー・レース、ホニトン・レースです。

トーション・レース

16世紀から20世紀にかけてヨーロッパ各地で発展しました。おもに縁飾りやポケットタイ風に使われます。トーションはフランスのトーション地方でつくられたことからこの名があります。ボビンの増減がない連続模様のレースです。

ステッチの種類も多く、初期はダイアモンド、幾何学模様、後期はローズステッチ、スパイダー幾何学模様があります。糸は黒のシルク、綿、麻です。

バックスポイント・レース

16世紀から20世紀にかけて発展しました。クロスステッチの模様にメッシュグラウンドでオープンにはフィリングがあり、ヘッドにはピコが付きます。幾何学模様・花・葉など自然の模様があり、糸は麻、黒のシルク、麻と綿の混合、そして綿です。

ベッドフォードシャー・レース

16世紀から20世紀にかけて発展しました。中でも1533年から1535年、ヘンリー八世の妻、クィーン・キャサリン（アラゴン）がスペインの母に教わりその手芸を人々に伝えました。クロスステッチのデザインにタリーやプラッツが伴う、フローラルデザインが特徴です。糸は黒のシルク、麻、綿です。

ホニトン・レース

ボビン・レースの産地として有名な英国の地方都市ホニトン産のレースの総称で、1560年から20世紀初期にかけて発展しました。それは16世紀後半に宗教弾圧を逃れて渡英したフランドル人がもたらした技術を受けて発達したもので、18世紀に開花しました。

初めに模様の部分の縁がつくられ、その中に地模様を作ります。組み方が最も複雑で、自由に曲線を出したり、立体的にしたり、模様の部分だけを独立させることができます。無地の編地にアップリケの技法を用いたものなどは、ヨーロッパ屈指の高級品として珍重され、とくにヴィクトリア女王の婚礼衣装とベールは有名です。1840年に行われた女王の御成婚の際の衣装の製作には、200名以上の熟練者が1839年３月から７ヶ月の月日を要したと伝えられています。また、ヴィクトリア女王の第一王女のためにもホニトン・レースの洗礼服が織り上げられました。この洗礼服は、その後、代々英国王室に伝わり、現在のウイリアム王子、ヘンリー王子の洗礼式にも用いられました。ホニトン・レースは、即位や成婚の折には貴重な作品が織り上げられ、保存されています。クロスステッチのデザインに太糸で縁どられたり、細糸クロスステッチが入るモチーフが多くみられます。19世紀初期までは単純なデザインですが、19世紀中期以降王室の要請でブリュッセルタイプのデザイン・レースへと変化していきます。糸は極細の麻、綿です。

ホニトン・レース　著者制作

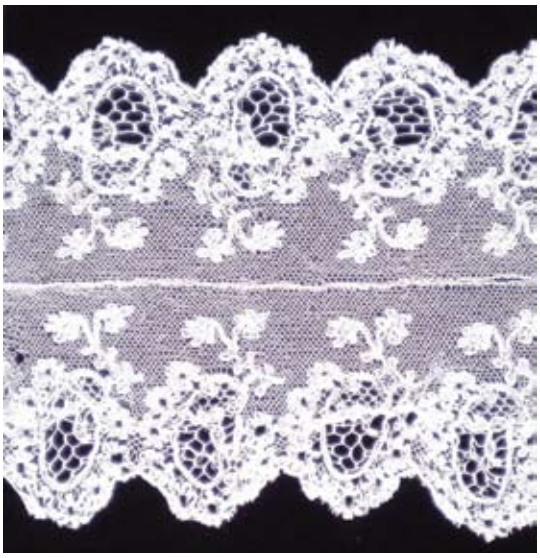
ホニトン・レース作品　日傘の少女　（表紙写真・著者制作）

「ヴィクトリア・パラソル」と呼ばれる顔だけがやっと隠れるほどの小さな日傘が1840年頃から流行します。日傘の色をドレスの色に合わせるようになったのも19世紀以来のことです。

1850年から1860年代のファッションはクリノリンスタイルのドレスが流行しました。垂直の帯は軽い鋼でつくられたケージ（鳥かご状）のクリノリンで、これによってスカートをドーム状に広げました。

６．19世紀の英国室内生活

当時の生活は、見かけ上の優雅な生活とはうらはらに火災の危険や低い照明度、暖房設備の不備など私達の想像を絶するほど不便なものでした。19世紀前半、人々が照明に使っていた獣脂ろうそくというのは、不完全燃焼すると悪臭を放つので、上手に芯を切ることが子供に課せられた大切な役割でした。また、19世紀のロンドンで黄水仙が好まれたのも、室内の悪臭を防ぐためになくてはならないものだったからです。こうした状況のもとで製作された幅の細いレースを手にしますと、当時の社会情勢や人々の心情、願いを見ることができます。生活のために製作し、目を酷使したために視力を犠牲にした人々や寒さの中では忍耐的手仕事であるレースには様々な込められた想いが詰まっています。劣悪な環境の中でも、美しい作品によって視覚的に救われていたかもしれません。豪華にレースを身に纏う人々、犠牲を払って心を捧げる人々、レースをめぐる人々のこのような思いに想像を馳せると、せつなく胸が痛みます。「光」と「影」の織りなす工芸品だと私は思います。



ブリュッセルボビン・レース
19 世紀　英国

７．ティーカップの移り変わりとレース

英国に紅茶が輸入されたのは17世紀半ば頃、中国からでした。それに続き英国で17世紀後半、ティーカップが作られました。まずはじめは中国茶に今でも使われている把手のないもの、ティーボールでした。その

機械レース　20世紀　英国

後、紅茶が熱すぎるので少し冷ましたいという思いからソーサーが作られました。19世紀初期になって作られたのがトリオ。トリオとはコーヒーカップとティーカップとソーサーのセットのことです。この頃からティーカップのサイズが大きくなりました。その理由は紅茶が安く買えるようになったため、量的にもたくさん飲めるようになったからです。アフタヌーンティーが最も盛んだったといわれる時期、1850年から1910年頃、ティーカップとソーサーそしてティープレートの組み合わせが増えていきます。このティープレートは、アフタヌーンティーの折に楽しむスコーン、サンドウィッチ、ケーキなどを添えるために使われました。

ボビン・レースも18世紀に英国の産業革命の機械化によって発展し、レースの美しさはさらに追求されます。ドイリー、テーブルクロス、テーブルセンターなどレースで飾られた華やかなお茶会がそれぞれの街で開かれたことでしょう。イギリスはインドより安価なルートでアメリカから大量の綿糸を入手できることで綿産業が盛んになりレース産業にも大きな影響を与えました。1851年には第一回大博覧会が開かれイギリス各地方の産業、文化が公開されレースにおいてもさらに発展していきました。20世紀より機械生産のネットグラウンドに手工業のレースをつけることでレースが豊富に使用されたファッションとなります。細糸で軽く華やかなファッションになるレースの機械化により、大量に使用され、幅広い層に発展していく時代でもあります。入手しにくい麻に代わり、手軽な綿糸の手工レースが見なおされ盛んになりました。

一方、ロシアや日本では1890年以降に産業革命が起きたとされています。

8．薩摩の糸（綿糸）事情

尚古集成館に、鹿児島紡績所製綿糸が所蔵されています。薩摩藩は慶応３年（1867年）、日本初の洋式紡績工場「鹿児島紡績所」を、続いて明治３年（1870年）大阪の堺に紡績所を築きました。その後、日本各地に紡績工場が築かれるようになりました。工場建築で指導に当たったのは薩摩藩士の石河確太郎で、鹿児島紡績所、堺紡績所の技術者たちが現地に赴き技術者指導を行いました。

また、日本にレースが紹介され、1880年、日本政府と東京府（現在の東京都）による官立のレース教場が京橋日吉町（現在の中央区銀座８丁目）に開校し、英国人のスミス夫人が指導にあたりました。

指導内容はおもに、英国王室が代々保護し伝承している繊細で美しいホニトン・レースであり、桜、楓、藤、松竹梅などの日本的な図案のハンカチ・襟・縁レースなどがこの技法を用いて織られました。この時期政府は率先して洋装化をすすめ、1886年には宮中でローブ・モンタンやローブ・デコルテなどの洋服が礼装として正式採用されました。

9．おわりに ― 現代の暮らしの中でのレース

古い刺繍糸でトーション・レース

レースは、身のまわりを飾る手芸として、またモードに欠かせない服地として、身近な存在です。レースといえば、服飾のワンポイント、ハンカチ、カーテン、テーブルセンター、テーブルクロスなどのインテリアとして、私たちの身のまわりで役立っています。今日では商品というよりも、その美術工芸的価値が認められ、世界各地で再興されつつあります。古典的レースを維持しながら一方で材質の異なる糸やカラー糸を使用して表現するアートレースも発展しています。芸術性・創造性の高い作品も織り出され、日々の生活に潤いをもたせるものとして、大切にされるようになりました。

レースの歴史をひも解いていきますと、宗教革命、フランス革命、産業革命を潜り抜けたレースの伝統や文化は、さらに世界経済の拡張に伴

う工業化を深く学ぶ機会となり、私にとっての導きの糸となったのです。政治、経済、社会、建築、美術工芸と交錯しながら発展してきたレースの変遷を知る度に驚きと感動で心が沸き立ちました。16世紀当初はイタリアからの輸入や模倣でしたが、伝統に接ぎ木を重ねながら今では各国の文化遺産として保存されてます。レースを通して、「創る喜び」、「見る喜び」、「使う喜び」、「異文化や歴史を知る喜び」という豊かな時間を享受でき過分な恩恵を頂戴しました。いつの時代にも人が集まり、人が交わりコミュニティが生まれた大切な空間であったことも想像を逞しくさせてくれます。

温もりのある人間の手仕事の伝統をボビン・レースから感じとることができます。一世紀前の刺繍糸、絹糸、アンティークレースの作品を手にしますと、時空を超え古の糸と私が繋がっているという意識に震えてしまう瞬間を幾度か経験しました。糸と道具と技術とが幾多の人の手を通して今の私に届けられたことに感謝しています。レースは、私にとってヨーロッパの歴史そのものであり、興味がつきません。そして、自分のレースを探る中、自然、歴史、伝統と継承をテーマに奄美大島、霧島、知覧と出会い、レースで表現してみました。

大島紬布とトーション・レース

古の糸：大島紬布とトーション・レース

作品：「古の糸」

1300年の歴史を持つ鹿児島県奄美大島特産の大島紬を誇りに思います。平絹織物であり「泥染め」の非常に手のかかる黒褐色の光沢を帯びた織物に心奪われます。私の中で東洋と西洋の織物が出会ったのです。「東洋と西洋の出会い」をテーマにボビン・レースの連続模様のデザインと大島紬の連続模様の融合を長い間考えておりました。それを実現したのがこの作品です。心ときめく繊細で表現豊かな、モダンで美しいデザインの大島紬と出会い、縁取りをボビン・レースであしらい、お互いのデザインが響き合う作品にようやく仕上げることができました。このことがきっかけで高い手工業技術の大島紬を伝統文化としてとらえ直し、育んできた奄美大島の歴史を学ぶ起点となったのです。東洋と西洋の古の糸との出会いは私の中で服飾文化を学ぶ醍醐味へと変化していきました。

深山の妖精：トーション・レース

作品：「深山の妖精」

えびの高原が春の息吹に微笑みはじめた頃、りんごの花に似た淡紅色の花が３輪から７輪垂れて咲く、ノカイドウに胸弾ませ会いに行きました。天然記念物に指定されているバラ科の花です。芽吹きたつ緑の中でアカマツ林の生命感に敬虔な祈りのような深い思いを道すがら感じます。

水温む小川の縁にノカイドウの低木が寄り添うように自生していました。辺りは静寂と澄んだ空気に満ちあふれ、吹き寄せる風が梢を揺らしました。目覚めたばかりの花びらは妖精のように純白でした。“繊細な深山の妖精をローズステッチの技法で！”と大自然とレースが私に囁いてくれた瞬間でした。あの日の出会いはその後、私のかけがえのない宝となりました。

紫響：トーション・レース

作品：「紫響」

不動池のバス停で空を仰ぐと、紅紫色の不思議な世界が漂っていました。薄絹のレースが韓国岳の山肌や岩肌を被っていたのです。

十五夜の花：京都西陣の金糸とブルー
ジュフラワー・レース

この時期の霧島の主役はミヤマキリシマの大群でした。ツツジの花で葉の大きさは赤ちゃんの小指の爪ぐらいでした。花も小花で枝先にちょこんとくっついていました。見渡すと、霞む空色が一層鮮やかに山肌を際立たせていました。

霧島に響き渡るミヤマキリシマを古絹糸で表現しました。風に揺らめく衣擦れの音が今でも耳に残ります。

作品：「十五夜の花」

四季折々、月の美しさに心奪われたのは知覧へ来てからでした。中でも秋の十五夜の月は格別で月明かりがこれ程までに美しいと思ったことはありません。

真夜中、その明かりで目が覚めたのです。漆黒に沈む深山と金色に輝く月は蒔絵の世界を醸し出しています。静かに時は流れ寝静まった水面に月が浮かびます。「月光」の調べが、空に舞います。こんな夜に遭遇すると眠ることはできず「月光」という言葉を繰り返し心の中でつぶやきます。本当に美しいと感じるものには、巧まずして出会うのかもしれません。

京都西陣の金糸で月明かりを表現し十五夜の花をイメージして作品にしました。最後に、美しく心温かな知覧の町で、自分のボビン・レースを探っていくというこの上なく楽しい時を過ごせて下さった方々の友情に感謝しています。知覧は鹿児島の歴史と文化に一層惹きつけられた最初の町であり、出会った時と変わらぬ風景が今なおそのまま残っています。

参考資料

相原恭子　『ウエッジ・ウッド物語』日経BP社　2000年
飯塚信雄　『ファッション史探検』新潮社　1991年
磯淵　猛　『一杯の紅茶の世界史』文藝春秋　2005年
小関由美・笹尾多恵　『ロンドンアンティーク物語』東京書籍　1993年
ジュネーブ美術歴史博物館『ヨーロッパのレース芸術』図録　品川区立品川歴史館　2001年
尚古集成館『海洋国家薩摩』　2004年
出口保夫　『アフタヌーン・ティの楽しみ』丸善　2000年
ノベルト・シュナイダー　『フェルメール』TASCHEN　2006年
福山有彩　『ボビンレース』NHK 婦人百科　1988年
マックス・フォン・ベーン（飯塚信雄訳）『ロココの世界－18世紀のフランス』三修社　2000年
ルーブル美術館『古代エジプト展』図録　2005年
Judyth L. Gwynne『 The Illustrated Dictionary of Lace』 B T Batsford Ltd,London　1997年
『最新世界史図説タペストリー初訂版』帝国書院　2000年
『ファッション辞典』文化出版局　2001年

プロフィール

喜平　ユカリ　（よしひら　ゆかり）

ボビン･レース作家　鹿児島出身､放送大学教養学部（社会と経済専攻）卒業､（人間と文化専攻）在学中。東京、英国でボビンレースを、放送大学では、欧米の政治思想史、政治史、歴史、欧米と日本の近代史を学ぶ。主な展示会：プランタン銀座読売サロン、銀座高松ギャラリー、薩摩英国館企画展など。

鹿児島大学総合研究博物館　News Letter No.27
■発行/2010年11月6日　■編集・発行/鹿児島大学総合研究博物館　〒890-0065　鹿児島市郡元1-21-30
TEL：099-285-8141　FAX：099-285-7267
http://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/